

展が現われた。足関節は、前症例と同様に背屈がみられない。

以上の結果から、足関節は、全体に背屈がみられず、尖足歩行である。

膝関節は、5症例全員、正常角度とあまり変化がない。股関節では、動揺性歩行が出現する。全員に立脚期には伸展がみられなかった。

以上のことから、DMP児の歩行パターンは、正常パターンと比較して股関節、足関節に多く変化がみられる。

## 10. Duchenne 型進行性筋ジストロフィー症 における筋力低下の分布について

国立療養所下志津病院

神 宝 知 行

国立療養所下志津病院入院のDuchenne 型進行性筋ジストロフィー症患者59名を対象として、徒手筋力検査を施行した結果を集計し、筋力低下の自然経過を調べた。頸部の屈曲と伸展、肩関節の内転と外転、肘関節の屈曲と伸展、手関節の背屈と挙屈、股関節の屈曲と伸展、股関節の内転と外転、膝関節の屈曲と伸展、足関節の背屈と底屈について検討した。股関節では、8~9才頃には筋力はほぼ3あるが、その後かなり急速に筋力は低下する。拮抗筋相互を比較すると、屈筋が伸筋より、外転筋が内転筋よりも $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$ 段階上の筋力を保っている。膝関節では、股関節よりも進行は緩徐で、拮抗筋を比べると、屈筋が伸筋よりもほぼ $\frac{1}{2}$ 段階上の筋力を保っている。

足関節では進行はさらに緩徐で、底屈筋が背屈筋よりもほぼ1段階上の筋力を保っている。

◎上肢については、肩関節では股関節と同様に、ほぼ9才頃3の筋力があり、以後低下する。拮抗筋間の筋力差は認められない。肘関節では、肩関節よりも進行は緩徐で、やはり拮抗筋間の筋力差が認められない。手関節では更に進行は緩徐で、やはり拮抗筋間の筋力差は認められない。頸部では伸筋が屈筋よりも1段階上の筋力を保っていた。以上の結果を要約すると、

- ① 筋力低下は上下肢とも遠位筋よりも近位筋に著しい。
- ② 拮抗筋間の筋力差の最も著明なのは足関節と頸部で、足関節では底屈筋が背屈筋よりも強く頸部では伸展が屈曲よりも強い。次いで差の著明なのは膝関節で、屈筋が伸筋よりも強く、次いで股関節の屈筋および外転筋が、伸筋および内転筋よりもそれぞれわずかながら、強いことが認められた。



③ 上肢では拮抗筋間の筋力差は殆んど認められなかった。

今回の集計の結果、最も印象深かったのは、膝関節、足関節、頸部の拮抗筋間の著明な筋力差である。とくに膝関節の屈曲、足関節の底屈、頸部の伸展等が、拮抗筋に比べ末期までよく保たれていることは本症の著しい特徴であり、拮抗筋間の筋力差が上肢には認められないことを考え併せると、頸部および下肢という、姿勢の維持に関係する部位に拮抗筋差が認められることは、本症の病態に関して興味ある事実と考えられる。

## II、PMD患者のJaw - Jerk Reflex について

国立療養所原病院

浜田泰三	小林誠
川添和幸	山田早苗
升田慶三	平木康彦
和田正士	河野七郎

### 〔緒言〕

Open - close - clench cycle 時の歯牙接触後に認められる Masseteric Silent Period には種々の因子が関与していると考えられている。そこで本研究は、monosynaptic reflex であるJaw - Jerk Reflex の潜時についてもPMD患者と健康者との間で差が認められるか否かを調べる目的で行った。

### 〔方法〕

被験者、被検筋、電極の位置は、前述の報告と同様である。測定に際しては、まず被験者に少し開口させ、下顎前歯部に舌圧子で下方へ圧を加え、舌圧子による圧にわずかに抵抗した状態でリフレックスハンマーにより下向きに舌圧子を殴打した。この時の振動音をコンデンサーマイクロフォンにより頬骨部で誘導し、これをトリガーとして歯牙殴打後の咬筋筋電図をATAC - 201に入力し、32回平均加算後記録した。

### 〔結果〕

図1は32回平均加算されたJaw - Jerk Reflex の記録の一例を示し、表1は、測定結果を表にしたもので、単位は msec である。PMD患者においては、歯牙殴打後のJaw - Jerk Reflex 出現までの潜時は平均6.7 msec、健康者は平均5.9 msecを示し、明らかにPMD患者の方が健康者よりも大きい値を示した。

↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

国立療養所下志津病院入院の Duchenne 型進行性筋ジストロフィー症患者 59 名を対象として、徒手筋力検査を施行した結果を集計し、筋力低下の自然経過を調べた。頸部の屈曲と伸展、肩関節の内転と外転、肘関節の屈曲と伸展、手関節の背屈と拳屈、股関節の屈曲と伸展、股関節の内転と外転、膝関節の屈曲と伸展、足関節の背と底屈について検討した。股関節では、8~9 才頃には筋力はほぼ 3 あるが、その後かなり急速に筋力は低下する。拮抗筋相互を比較すると、屈筋が伸筋より、外転筋が内転筋よりも 1/2~1/4 段階上の筋力を保っている。膝関節では、股関節よりも進行は緩徐で、拮抗筋を比べると、屈筋が伸筋よりもほぼ 1/2 段階上の筋力を保っている。